
白い黒と黒い白

道化童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い黒と黒い白

【Nコード】

N3589BA

【作者名】

道化童子

【あらすじ】

ナスカは白魔法科に所属し、水魔法を専攻する学生ではあるが、実は黒魔法である火の魔法が得意だった。一方、黒魔法科に所属し、火魔法を専攻するも、実は白魔法である水魔法が得意な少女シェリンと補講教室で出会う事になった。第二回このライトノベルがすごい大賞落選作品を改修した作品。Pixivにも投稿。

第一節

「結局どこなんだよ、教室……」

廊下を歩きながらぼやく少年。

「『西館二階の三番目の教室』ってどれだよ、どこからだよ……曖昧すぎるんだよ」

悪態をつく彼が向かうのは、最終補習の教室。

彼はこの学園の一年生で、ナスカという名前だ。

ここに来てほぼ一年となる。

つまり一年生の終わりを迎えたわけだが、彼の一年生は、まだ終わりを迎えられはしなかった。

劣等生の彼は、学年末のテストで不合格となったのだ。

そして、再テスト、再々テスト、再々々テストを次々と落第し、最終的にこの最終補習を受ける事になったのだ。

「しかし、最終補習って何やるんだ。黒魔法科の連中と合同って聞いたけど、自習か？」

教室を一つ一つ探して回る放課後。

やる気も何もなかった。

ここは剣と魔法の世界。

大陸の西を領土とする、発展した文化を持つカドメ王国は、勇敢な騎士団で有名な国だ。

そして更に、高度な魔法研究が盛んであることでも有名である。

この国には白魔法と黒魔法を共同で研究する魔法研究施設がある。仲の悪い白魔法と黒魔法をまとめただけでも凄い事だが、更にここにはその研究成果を学ぶ下部組織、カードウ魔法学園があるのだ。ここでは魔法の素質ある若者たちが、その素質を伸ばすための教育を受けている。

学園はいくつかの学科に分かれているのだが、大きな学科で言えば白魔法科と黒魔法科の学生が大半となる。

この二つの違いはと言えば、実際は使う元素が違う程度だが、長い歴史が多いなる分断を作ってしまった。

白魔術は、教会を発祥とし、元々は人々を癒し、魔を祓うために作られ、教会で研究されてきた魔法で、光や水、土の元素を用いる。黒魔術は純粹な兵力として、特に中央の影響力の及びにくい地方の貴族などが研究させて作られてきた魔法で、火や雷、風の元素を用いる。

白魔法を使う教会側から、黒魔法は悪魔の術であると言われたことから、根深い対立があった。

歴史の裏では、血で血を洗う抗争が繰り広げられてきた。

それを先代の王が、結局同じく元素を利用する魔法であり、合同で研究した方が合理的である、との指摘を受け、王の命で合同の研究施設を作るに至った。

もちろん完全に仲良くなったわけではなく、王の命令で表面上仲良くなっただけの話ではあるが。

そしてその施設も既に長い期間を経て、合同研究で新たな事実も分かり、この学校も多くの魔法使いを輩出するようになって来た。ナスカは、そんな学校の白魔術科でことんまで落ちこぼれている学生である。

「えっと、多分こっつばいな？」

「どこから」という明確な基準のない「西館二階の三番目の教室」と思われる教室を外から覗いてみる。

中では一人の女生徒が、辺りをきよろきよろしていた。

制服からして、黒魔法科の生徒だろう。

察するに、彼女の心はこんな感じなのだろうか。

（え？　だ、誰も来ないよ？　本当にここでいいのかな？　私、間違えた？　ど、どうしよう……）

少女の見た目は悪くない。

多少小柄だが、不安げな大きめの目が可愛く、穏やかそうな少女

で、とても火や雷を操って敵を攻撃しそうには思えない。

いや、それが出来ないから、この落ちこぼれの教室にいるわけではあるが。

ともかく、仲間がいる事で多少安心したナスカは教室に入る事にした。

「くられ！ フライングえめるフラッシュファイナル！！！！」

実はナスカは変な事をして人を混乱させる事が多い生徒でもある。

「え？ きゃーーーーー！」

単に叫びながら教室に踏み込んでジャンプしただけだが、いきなりやられると大抵の人間は驚く。

ぱしゅん

ナスカの顔に水飛沫が当たる。

「……っ」

少女が咄嗟に出したのは、水魔法。

それには殺傷力はないが、押し黙る程度にはダメージを受けた。

「あ……ご、ごめんなさい！」

少女の慌てる声。

ナスカは多少ふらついたが、立ち直った。

目の前の少女は、申し訳なさそうにナスカを見ていた。

「ふむ、以後気をつけたまえよ」

ナスカは無意味に気取って見せた。

実際ナスカの無意味で唐突な行動が引き起こした事であり、少女にあまり非はないのだが。

「本当にごめんなさい」

だが、少女はとにかく謝った。

「まあ、それはそれとして」

ナスカはハンカチで顔を拭きながら言う。

「最終補習の教室はここでいいんだよね？」

「うん、多分いいと思うし、私も最終補習なんだけど……」

少女は何か言いたげにナスカを見つめる。

「……？」

女の子に、意味ありげな上目づかいで見つめられると、多少の事では動じないナスカも少し困惑してしまう。

ナスカは性格と成績こそ残念だが、顔は整っており、女生徒にはもてる方だ。

特に、生徒の9割が女生徒という白魔法科において、ナスカは「顔は格好いいけど、付き合うのは無理」「黙っていれば格好いいんだけどね」などと噂される注目の的なのだ。

だから、一部の将来聖職者になろうという少女たちの、限らない慈愛の瞳で見られたりする事には慣れているのだが、こういう視線には慣れていない。

「……なんだよ、俺の顔に目と鼻以外に何か付いているって言うのか？」

「えっと、口？」

「まあ、それは付いてるだけで飾りみたいなもんだ。使わないからな」

「はあ……」

多少茫然とした目に変化した少女。

「あの、そんなどうでもいい事より……」

案外的確にナスカを精神的に痛めつける少女。

「さ、さっきの事は、内緒にしておいて欲しいの」

うつむきながら、小さな声で言う少女。

「さっきの事って、脳内の誰かと楽しげに歓談していた事か」

「そんなことしてないよ!？」

「じゃあ、何だ」

「えっと、その……」

少女は再びうつむいて、辺りに人がいないかを確かめながら、小声で言う。

「水魔法を使った事……」

真っ赤な顔で、消え入りそうな声で少女が言う。

「ああ……」

ナス力は理解した。

魔法にはそれぞれ属性というものがあり、それを鍛えて行くものなのだ。

例えば、ナス力は水の魔法属性という事になっている。

それを使い続ける事で、その魔法の属性が深まり、より大きな魔法が使えるようになる。

だが、別の属性の魔法を使うと、それが弱くなる。

だから、この学園では他の属性を使う事を推奨していない。

特に、黒魔法科は白魔法属性、白魔法科は黒魔法属性を使う事を校則で禁止している。

それを破ると、謹慎・停学等の罰を受ける事もあるのだ。

「別にいいが、魚心あれば水心と言ってだな、分かるよな？」

ナス力はよく知らないが、最近読んだ物語で悪徳権力者が言っていた台詞を言ってみた。

ちなみにその物語は、懇願をたてに悪徳権力者が女に体の関係を迫るものだが、正義の魔法使いに退治されてしまう。

「よ、よく分からないけど、ハチミツ食べる？」

少女は自分のカバンの中からハチミツのビンを取り出す。

「いや、いらないうか、なんでそんなもん持ち歩いているんだ」

「……好きだから」

「だろうけど……まあ、別に言う気はないけどな」

ナス力は、不正を先生に言いつけるような人間ではない。

「でも……」

だが、少女は不安げにナス力を見上げる。

「あー、じゃあ、こうだ」

ナス力は、周囲に誰もいないことを確認すると、右手の指を真上に差し出す。

すると、そこから炎が湧き出し、徐々に大きく噴き出した。

それは強い光を放つが、すぐに消えた。

「これでいいだろ？」

「……………？ あ、ハニートースト？」

「まず、ハチミツから離れろ」

ナス力は周囲を再度確認する。

「俺も黒魔法使ったから同じだって事だよ」

「ああ、うん、分かった……………ありがとう」

自分のミスのために、自らも校則を破って共有してくれたナス力への純粋な謝意。

ナス力は言葉通りを受け取るのが照れくさいが、茶化す雰囲気でもなかったので、話題を変えることにした。

「ところで、とっさに水魔法が出てくるような奴がどうして黒魔法科にいるんだよ。最初から白魔法科にいれば良かったんじゃないか？」

ナス力は単純な疑問を言ってみた。

魔法には属性があり、人はその属性を極めることで一つの魔法を身に付ける。

少女が水魔法が得意かどうかは不明だが、少なくとも好きな人間が、黒魔法科にいても、何の得にもならない。

黒魔法属性があればいいのだろうが、ここに在るという事はさっぱりなのだろう。

「……………」

少女は、言いくそくに目をそらした。

「あー、込み入った事情があるなら別に言わなくてもいいけどさ」

「言っても、笑わない……………」

「は？」

少女が真剣な表情で訊く。

そのあまりの真剣さに、ナス力は少しだけ怯む。

「い……や、笑うことは、ないと思うけど……」

「じゃあ、言うよ……あのね」

少女が意を決して口を開く。

「入学申込書に、黒魔法と白魔法のどちらかに丸を付けるところがあつたでしょ？ あれを間違えて、黒魔法の方に丸つけちゃ……」

「わはははははは！」

「爆笑！？ 笑わないって言ったのに！」

半泣きの少女。

「いや、でもな……ぷっ……笑うなって……あはははは……無理だろ……」

「うわーん！」

少女がいよいよ本気泣きに移行しかけたので、ナス力は表情を戻す。

「あー、悪かった。もう笑わない」

「……本当？」

「ああ。よくあるよな。ちょっとしたミスで、丸つけるの間違えて……全く正反対の……学科に……はははははははは！」

「嘘つき！ うわーん！」

号泣が入った少女。

それはナス力が笑い飽きるまで続いた。

「で、あなたこそどうなのよ」

まだ若干の鼻声の少女が、懨然とした表情で言う。

「何がだよ」

「だから、あなたも火の魔法使ったでしょ。どうして白魔法科にいるの？」

「あー……」

ナスカは頭をかく。

「俺のは別に笑える話じゃないんだが……」

「大丈夫、絶対に笑ってあげるから！」

「いや、その宣言はどうだろう」

先ほどの仕返しに笑う気満々の少女。

そうであればある程言いくいだが、少女の話を聞いた上、大笑いしてしまった手前、言わないわけにもいかない。

「俺もさ、確かにここに来るまでは火魔法が得意で、だからこの学園に来たんだ」

「あははははははは！ あつ、まだだった！」

「……真面目に聞けとはさすがに言わないが、ちよつと黙っててくれ」

ナスカの突っ込みにさすがに黙る少女。

「けどさ、俺の親父は聖職者じゃないけど、敬虔な信者で白魔法の実力者なんだよ。また古い考えの人でさ、黒魔法なんてものは絶対に許さないって、無理やり白魔法科に変えられたんだよ」

今までほとんど誰にも言っていない話を、何故か会ったばかりの少女に言う羽目になった状況に若干の違和感を感じながら、話を続ける。

「で、ある程度火属性が出来上がっていた俺には当然白魔法の属性に染まれるわけもないからさ、こうして一年がかりでここまで落ちこぼれたんだよ」

黙り込む少女。

最早笑う気すらないのだろう。

「どうだ、全然笑えない話だっただろ？」

「……ずるい」

「は？」

「そんな、ちゃんとした理由、ずるい！」

少女は、突然猛烈に怒りだした。

「いや、そんなことを怒られてもだな」

「もつと、入学申込書で丸つける時に誰かと肘が当たってずれたとかそんな理由じゃなきゃだ！」

「そんな奴いないだろ。いたら指さして笑ってやる」

「うわーっ、また笑われる！」

「お前かよ！」

ナスカもさすがに突っ込み疲れて来た。

元々ボケ属性の強いナスカには突っ込みは慣れないポジションなのだ。

「もういい。あー疲れた……そう言えば先生来ないな。本当にここでもいいのか？」

「だと思っけど、知らない」

「だろうな。……そう言えばさ、あー、名前知らないけど仮にゲルゲゲとしよう、なあゲルゲゲ」

「どうしてゲルゲゲ！？ 名前くらい聞いていいから！ 私はシェリンだよ」

少女は自分の胸を指して言う。

「まあ、じゃあそれでいい。ところでさ、黒魔法科の……」

「せっかく名乗ったんだから呼んでよ！」

「面倒くさい奴だなあ、シェリンは」

「そんな呼び方は駄目！」

ナスカはいちいち面倒になつてきたので、下手に出る事にした。

「分かったよ、シェリン。いい名前だな」

全くその気のない表情で言うナスカ。

「そ、そう？ ありがとう、えっと……ゲルゲゲ？」

「ナスカだ。それはいい。ちよつと黒魔法の教科書見せてくれないか？ 俺も白魔法の教科書見せるからさ」

ナスカは、カバンから自分の教科書を出してみせる。

「う、うん」

シェリンは多少戸惑いながらも、カバンから教科書を出してみる。
「じゃ、ちよつと見せてくれ」

ナスカがシェリンの教科書を手に取り開いてみる。

シェリンもしょうがなく、ナスカの教科書を開いた。

「へえ……」

シェリンがとりあえず選んでいる属性は火だった。

その教科書は、ある程度の火魔法を体得している人間にとって、とても分かりやすいものだった。

炎の増幅法、一点へのパワーの集中、空気の薄い場所での使用法など、火魔法の基礎が存分に書かれた分かりやすい教本となっていた。

そして、それはシェリンも同様のようだった。

ナスカが仮に選んだ水魔法が彼女にはとても理解しやすいものなのだろう。

二人は集中してそれを熟読した。

先ほどまでの騒ぎはなくなり、教室に静寂が訪れた。

どれだけの時間が流れただろう。

集中していた彼らには長時間という感覚がなかったが、しばらくしてから、先生が教室に現れた。

「おお、やっぱりこっちにいたのか。全然来ないからどうしたもんかと思ってたんだよ」

適当な教室名を書いた先生は、やはり別の教室にいたようだ。

「んー、まあもう遅いし、お前らも自分で勉強してたようだし、もう合格でいいんじゃないか？ どうせ簡単な小テストするだけだったからな。じゃ、お前らもう帰れよ」

言うだけ言って、先生は帰って行った。

「何なんだ」

せっかく集中して読んでいたのに水を差されたナスカは、少しだけ気分を害していた。

「まあ……帰れと言われたから、そろそろ帰るか」

「うんうん」

シェリンはそう言いながらも本から目を離さなかった。

「おい、ゲルゲゲ」

「うんうん」

「人に肘がぶつかって黒魔法科に行ったドジなシェリン」

「うんう……うわーん！」

やっと正気に戻った。

「あんたなんて！ たった今覚えたキュアーで回復してあげるんだから！」

「落ち着け、そしてありがとう」

なんだか少しだけ回復したナスカは、シェリンの肩を掴んで落ちつかせる。

「！ う、うん……」

ナスカの顔を間近で見たシェリンは、少しだけ頬を染めて目をそらす。

「ま、今日はもう帰ろう」

「で、でも、もうちょっとだけ読みたい！」

「奇遇だな、俺もだ」

ナスカはシェリンの手から教科書を奪い、カバンにしまう。

「ま、折角知り合っただんだから、また会おう。その時に教科書をまた見せ合えばいい」

「え、あ、うん……」

少しの戸惑いと、少しの嬉しさと、少しの希望。

そんな淡い感情とともに、シェリンはうなずいた。

「また、会いましょう」

黒魔法と白魔法の最低成績者の二人は、こうして邂逅することになった。

第二節

「そういうわけなので、決められるなら、次の休みまでに決めるように。それ以降はこちらで勝手に決めるからな」

困惑のざわめきが広がる教室。

だが、それも仕方がないだろう。

白魔法科二年生のークラス。

落第しかけたナスカもなんとかこのクラスに籍を置くことが出来た。

二年に上がったところで、特に変わらないつまらない授業が続くのかと思いきや、二年から合同演習というものがあるようだ。

これは、実際に学校外に出て、魔法の実地訓練をしてくるものなのだが、グループを組んで行う。

これがなかなか難しく、大抵の生徒は自分でグループを組むことができない。

なぜなら、条件が厳しいからだ。

- ・ おおよそ5人程度、4人から6人のグループを作る
- ・ グループ人員の属性は全員別でなければならない
- ・ 最低一人は白魔法科および黒魔法科双方の人間がいなければならない

一見簡単なようだが、白魔法科と黒魔法科の間にはなんとなく溝があり、普段の接点はない。

元々の知り合いがいるならともかく、大抵は相手の科に友達はいない。

そこには根深い問題があり、なかなか難しいのだ。

元々の対立の歴史なんて、今の学生には関係のないはずではある。だが、やはり歴史は歴史である。

先生の世代、先生の先生の世代の対立が、この世代へと遺伝してしまっていることも往々にある。

そもそも魔法使いというものは多くが自分の魔法自分の属性が一番だと思っているところがある。

その上、方向性が異なる魔法を使うとなると、もう理解できない人種となるのだ。

ナスカのように、黒魔法の属性を持つのに白魔法科にいるような人間は、白魔法科の人間も黒魔法科の人間も大して変わらないことを知っているが、大抵の人間はそうではないのだ。

交流がないことによって、「嫌われているかも？」と思い込んでいる生徒が多く、それ故に「だったら、こちらも親しく出る必要はないよね」と勝手に思うことも多いのだ。

だが、実際には多くの属性があり、それらが相互協力することで大きなパフォーマンスを発揮することが出来る。

それは口で言っても理解がなかなか難しい、だからこそその合同演習なのだ。

チームを自分たちで決められる生徒はほとんどいない。

だから、ほぼ全員先生が決めたチームで演習を行うことになる。

そうなると、相手の科はもちろん、同じ科の友達と同じチームになれないため、困りどころでもあるのだ。

「うーん、まあでも、別に誰とでもいいしなあ」

ナスカは基本的に人見知りしないため、誰とでもうまくやっていけるので、チーム構成はどうでもよかつたりもする。

「どうしてもよくありませんわ」

そんなナスカのつぶやきに答える者がいた。

透き通るような白い肌と長く雑じり気のない金髪。

折れそうな細い身体。

見た目も流れる血も、生粋のお嬢様。

「何でだよ、エメリィ」

「……まずは、そろそろその呼び方をやめていただけませんか？

私には枢機卿様からいただいた、エメルフィーという名前があるのです」

「長い上に格好悪い」

ナス力はあっさり言う。

「枢機卿全否定！？……私の名前ですし、かりそめにも尊重していただけませんか？」

「いやでも、エメリイの方が可愛いからいいんじゃないか？」

ナス力が言う、特に深い考えのない言葉に、彼がエメリイと呼ぶ少女は一瞬で真っ赤になる。

元々の肌が白いだけにその辺かは一層分かりやすい。

「……ナ、ナス力様がそうおっしゃるのなら仕方ありませんね」

エメリイは顔を隠すためにナス力に背を向ける。

「で、何がどうでもよくないんだ？」

「……？ 何のことですか？」

「いや、さっきどうでもよくない、とか言っただけじゃないか」

「あ、ああ、そうでしたわね」

エメリイが軽く息を吐く。

「先生にお任せすると、私とナス力様が一緒のチームにならなくなるかも知れせんわよ。裏から先生に手を回す方法もありますが、ナス力様はお怒りになりますでしょ？」

「んー、まあ、そうだろうな」

ナス力は軽く返事をする。

ナス力は基本的にいつも軽い性格ではあるが、一度エメリイに切れたことがある。

それは彼女が、金の力で教師を動かそうとした時だ。

ナス力は怒った上で、二度と話しかけるな、と言った。

その時はエメリイが泣いて反省して謝ったことで仲は戻ったのだが、それ以降、それまでちよっとお高く止まっていた感のある彼女が少し接しやすくなった。

更に、それまでも入学前からの知り合いで仲はよかったのだが、

その事件以降、いつもナスカについてくるようになった。

簡単に言えば、これまでわがままが通ってきたお嬢様が叱られて、ナスカが気になる存在になったのだ。

「チームが違ってしまったえば、ナスカ様のお世話が出来なくなりますわ」

エメリイが困った様子で言う。

「いや、別に世話なんて要らないぞ。まあ、どうしても困ったら、白魔法科の子は優しいから同じチームになった子が助けてくれるだろうし」

「演習は黒魔法科の方も一緒ですよ！ あの人たちは白魔法の悪いところを見つけては大声で笑うのですわよ！」

「いや……まあ、そういう奴もいるかもしれないけどさ」

見てきたかのように言うエメリイに、呆れ気味に言うナスカ。

「それに私はナスカ様のお父様に、ナスカ様をよろしくと頼まれたのです。その責務を全うできなくなりますわよ」

「いや、だから、それは親父の社交辞令みたいなもんだって」

エメリイの父は、上位の貴族であり、また敬虔な信者でもある。

同様に信者であり、また白魔法使いとして名のあるナスカの父と親交が深い。

そして、ナスカの父はナスカを無理やり白魔法科に入れたことからやけにならないかと心配し、エメリイに頼んだところはある。

エメリイは純粋なお嬢様であることもあり、頼まれたことには責任を持つてしまうのだ。

「どうしてもって言うなら、チーム作ればいいけど、知り合いいるのか？」

「黒魔法科になんか、知り合いなんていませんわ」

平然と言うエメリイに、知り合いいないのにどうして見て来たかのような黒魔法科の悪口が言えるんだよ、と突っ込みたくなったが、言っても意味がないので言わなかった。

「ナスカ様はお知り合い、いらっしやらないんですの？」

「あー、んー、いないことはないけどなあ……」

ナスカはシェリンの顔を思い浮かべる。

「あいつはどうなんだろなあ……」

「お知り合いがいらっしゃいますのね。確かに黒魔法科は殿方も白魔法科よりも多いと聞きますし」

「いや、女だけだな」

ナスカがいうと、エメリイが傍目でも分かるほどに驚く。

「ナ、ナスカ様？ その方はどういう関係の方ですか？ 親しいんですの？ か、可愛い方ですか？」

「どうしたエメリイ、とりあえず落ち着け」

「……は、はい。申し訳ありません……」

エメリイは大きな深呼吸をした。

「そ、それで、その方はどなたですか？」

「んー、シェリンっていう、この前の最終補習で会った子なんだけど」

「最終補習……ということは、黒魔法科最下位の方ですかね」

エメリイは少しだけほっとする。

そんな人間なら自分が太刀打ちできる、と思ったのだろう。

「そんな方は私たちのチームには相応しくありませんわ。せめて足を引く張らない方でないと」

「いや、俺も最下位なんだがな……」

「ナスカ様は私と一心同体です！ だからいいんですの！」

「そんなものになった覚えはないが……ま、知っててちよっと話をしたっただけだから、向こうもいきなりチームを組もうと言われても困ると思うな」

「そうですか……」

エメリイが複雑な顔をする。

黒魔法科の知り合いがいるならチームが組める。しかし、ナスカの知り合いで女生徒というところがあまり気に入らない。だから、これで良かったのか悪かったのか分からない。

「ま、チームを作りたいって言うなら、また考えよう。他に何かできるかもしれない」

ナスカが立ちあがる。

「今日は帰ろう。校門まで送る」

「はい、ありがとうございます」

エメリイは少しだけ嬉しそうにそう言って、自席に荷物を取りに行く。

カードウ魔法学園は基本的に全寮制である。

殺傷力の高い事もある魔法使いを、不安定な育成中の状態で外に出せない、演習や夜間講習など夜間に及ぶ授業も多いことからの規則なのだが、あくまで原則だ。

貴族の子等はほとんど寮に入っていないし、特殊な種族の生徒は寮での集団生活を嫌い、やはり寮には入っていない。

エメリイはまさにその貴族の令嬢であり、毎日送り迎え付きで家に帰っている。

「お待たせいたしました」

帰る用意を持って、戻って来るエメリイ。

「じゃ、行くか」

「はいっ」

二人は教室を出る。

廊下は下校する生徒、話しこんでいる生徒が沢山いて賑やかだ。

「あ、ナスカくん、エメルフィーさん、さよなら」

「おう、明日」

「ごきげんよう」

挨拶を交わしながら歩く廊下。

階段を下り、出入り口に向かう二人。

そこは、色々な学年や科の生徒が入り混じる空間。喧騒も大きい相知り合いも少ない。

「あ、いた！」

そんな中、聞いたことのある元気な声が響く。

一瞬だけの静寂と、視線の集中。

振り返るナスカが見たのは、こちらを指さす少女。

「シェリン？　もしかして俺に用か？」

「うん、そう！　えっと……ゲレゲレ？」

「……お前はどの科にいても落ちこぼれたと思うぞ？」

「そんなことないっ！　ど忘れしただけ！　えっと……なんだった？」

思い出そうと試みたものの結局思い出せないシェリン。

「俺は麗しのダンディだ」

「そう！　麗しのダン……あれ？　違う気がする！」

「よく気付いたな、結構頭がいいぞ」

「そ、そうかな……えへへ……」

褒めてもいないのに照れるシェリン。

「ナスカ様、こちらのユニークなお方はお知り合いですか？」

「あ、そうそう、ナスカ！」

エメリイの問いに、シェリンが割り込む。

「あー、まあ、知り合いのシェリンっていう劣等生だ」

「ひどい！」

「で、こっちはエメリイだ」

「ごきげんよう」

「あ、こんにちは」

挨拶を交わす二人。

だが、ナスカはエメリイが少し不機嫌になっている事が分かっている。

彼女は黒魔法科を良く思っていないからだ、とナスカは思った。

実際は、見知らぬ少女がナスカと仲がいい事を気に入らないのだが。

「あー、とりあえず二人とも悪い奴じゃないから……」

「そんなことより！」

これからエメリイを説得しようとしていたナスカの言葉を遮り、

シェリンが言う。

「ねえねえ、合同演習でチーム組まない？」

「へ？ ああ……」

「こっちでね、友達三人とチーム作ったんだけど、白魔法科の人が必要だったから、入ってくれると嬉しいな。あ、エメリイさんも一緒に」

一方的に話すシェリン。

エメリイは少し呆気にとられている。

「んー、まあ別にいいぞ。こっちもチーム探してたし」

「ナスカ様！？」

「？ 駄目か？ さつき探してるって言ってたから」

「いえ……駄目ではありませんが……」

エメリイが複雑な表情を見せる。

「？ いいんだよな？」

「……ええ、構いませんわ……」

「ほんと！？ じゃ、他の子呼んで来るね」

そう言うのと、シェリンは走り去って行った。

「……ナスカ様、あの方とはどういうご関係ですか？」

エメリイが少し不安げに訊く。

「言っただろ、最終補習の時に会ったんだよ」

「……それだけにしては、とても仲がよろしくありません？」

「そうか？ まあ、話しやすい奴ではあるな」

ナスカはシェリンの去った方向を見つめながら言う。

エメリイは、何か言おうとしたが、シェリンが戻って来るのが見えただけ、言わなかった。

「呼んで来たよ！」

嬉しそうに戻って来るシェリン。

彼女が連れて来たのは黒魔法科の制服を来た二人の女生徒だった。

一人は黒い髪を左右で束ねた少女。

気の強そうな顔で、じっとこちらを睨んでいる。

もう一人は肩にかからない程度の髪に知的な瞳、そして非常に小柄な身長少女。

「あのね、こっちの人がエメリイさん、でこっちが……えっと、ゲルマン？」

「お前はなにか、俺を忘れる呪いでもかけられてるのか？」

「違うよ！ 覚えにくい名前なの！」

「いや、絶対違うと思う」

こんなやり取りの中でも、ちょっとしたピリピリ感が漂っている。

「ま、こっちの紹介はこっちでやるから、そっちの紹介してくれ」

「う、うん……あのね、この子がアールヴァンテ。アールって呼んでるの。雷属性なの」

シェリンは黒髪の少女を紹介する。

アールと呼ばれた少女は、挨拶もせず、ふん、とそっぽを向いた。

「で、でね、この子が……」

「ボクはトイネルヴィ。長いからトイネって呼んでね。風の属性を専攻してるんだ。よろしくね」

シェリンが紹介する前に、小柄な少女は自ら名乗った。

「あ、あのね、トイネは成績は黒魔法科一番なのよ」

シェリンが負けずに紹介する。

「じゃあ、そっちも紹介してよ」

「ん、ああ、こっちが……たしかエメルフィーだったっけ。長いからエメリイって呼んでる。光属性の魔法を使う」

「よろしくお願いしますわ」

ナスカの紹介に、エメリイが頭を下げる。

「あ！ あの技の人？」

突然シェリンがエメリイに尋ねる。

「？ 何の事ですか？」

「あの、えーっと、確かフライングえめるフラッシュファイナル」

「……それはおそらく、ナスカ様が私の名前で遊んだだけですわ。私はそんな技なんて持ってません」

そう言いながら、エメリイはナス力を睨む。

「ま、そんな事はともかく。俺がナス力。まあ、一応水属性って事になってる。シェリンとは最終補習で会った」

ナス力は適当に自分の紹介を終えた。

「で、この五人でチームって事で」

「ちょっと待ちなさいよ」

突然割って入ったのは、先ほどからずっと黙っていた、黒髪のアール。

「あんた、最終補習受けるような成績最下位の役立たずなんですよ。なんでこんなのとチームを組まなきゃならないのよ」

アールはナス力を指さして言う。

「あー、まあ言いたい事は分かる……」

「聞き捨てなりませんわね！」

ナス力がやんわり受け流そうとしたところ、エメリイが受けて立ってしまった。

「ナス力様を悪く言う事は許しませんよ」

「いや、さっきお前、シェリンの事全く同じように言ってたじゃ……」

「ナス力様は黙っていてくださいまし！」

「……………！」

いつも淑やかなエメリイの大声に、ナス力は黙ってしまう。

「そもそも白魔法なんて金持ちが道楽でやってる役立たずなのに。

回復魔法が使えるからまあ、足手まといでも我慢してあげてもいいのに、それが使えないなら必要ないのよ」

アールは見た目通り気の強い少女で、やはり白魔法を嫌っていた。だが、そう言われて黙っているエメリイではない。

「白魔法は教会で研究されてきた由緒正しいものですわ。黒魔法こそ田舎貴族の道楽にお恵みいただいて生きながらえて来たのではありませんの？」

「何よ！」

「何ですの！」

エメリイとアールが一触即発の状態に対峙している。

こんなところで魔法でも使われたら停学や退学にすらなりかねない。

しょうがないので、ナスカは仲裁に入る事にした。

「まあまあ、ここはワシの顔に免じて引いてはくださらんか」

「何者よあんた！」

「ナスカ様はお黙りくださいまし！」

矛先がナスカに変わったただけだった。

第三節

この国は、騎士で有名な国であり、昔から騎士団入りを希望する少年は多かった。

だから、この学園に来て魔法を学ぼうとする学生は、その残り、つまり女子学生のほうが多くなる傾向にあった。

ただ、近年では魔法が高度化し、それを学ぼうとする男子学生も増え、また、女性騎士も増える傾向にあり、男女比は平準化されつつあった。

だが、彼らの世代になって、とある事情で急激に騎士団を志願する少年が増え、魔法を学ぼうとする学生が激減してしまったのである。

現在、この学園は男子生徒よりも女子生徒が圧倒的に多い。

だから、チームを組めば、男子一人女子四人という構成は普通にあることでもある。

だが、そんな一般論は今のナスカには関係なかった。

「えー……とりあえず落ち着いていただき誠にありがとうございました」

ナスカは深々と礼を試みる。

往來の喧嘩で騒ぎになりそうだったので、必死で近くの教室に連れ込み、座らせて、やっと冷静になったところだ。

ナスカは女同士の喧嘩の仲裁なんてやった事もないが、シェリンはおろおろするだけであり、トイネは静観しているだけなので、彼が動かなければならなかった。

「まあ、色々あるとは思いますが、チームになるわけですし、みんなで仲良く……」

「嫌よ」

限りなくへりくだって話していたナスカの話をあっさり断ったのはアール。

「あんたは駄目だし、あの女も嫌い。あんたたちとチームを組む気はないわ」

「何ですって!?!」

「あーもう、落ち着けて!」

ちよつとつつき方を間違えるとすぐに再燃してしまう。

さすがに楽天的なナスカも頭が痛くなってきた。

もうしばらく放置して、好きに喧嘩させて疲れるのを待とうか、と投げやりに思い始めた。

「ねえねえ、あのね」

そんなナスカにこつそりと話しかけて来るのは、隣に座っていたシェリン。

「アールを悪く思わないでね。あの子悪い子じゃないの」

「うーん、あそこまで攻撃的だと、さすがに難しいなあ。でもそれはエメリイも同じか……」

ナスカは喧嘩を続ける二人を眺めながら答える。

「で、でもね、成績の悪い私をかばってくれるし、助けてくれるし、色々教えてくれるの。本当は優しい子なんだよ!」

「へえ」

ナスカは少しだけアールを見直す。

要するにエメリイと同じなんだろう。

お互いに役に立たない人間をサポートしていて、だからチームを組みたくて、そのチームは役に立たない人間がいるから、それ以外の人間を最高にしたいのだろう。

そうなると話が少し見えて来た。

後は、黙っている小さな少女がどういうスタンスか、だろうか。

「ところで」

ナスカが少し大きめの声を出すと、喧嘩していた二人も振り返る。

「トイネ、だったつけ? お前はどっ思ってるんだ?」

「え? ボク? 何が?」

いきなり話を振られて驚くトイネ。

「いや、チームの構成とか白魔法と黒魔法とかの話」

「うーん、チーム構成はやってみないと分からないよね。学校の授業だけじゃ分からないから演習があるんだし。一年生の成績が悪いから演習が出来ないとも限らないし逆もそうだし」

トイネがあっさりと二人の喧嘩の原因を否定したので、二人は反論も出来なくなった。

「白魔法と黒魔法は、分けてることそれ自体馬鹿馬鹿しいと思うてるよ。同じように元素を使う魔法だからね。単にそれを研究して来た団体と歴史が違っただけで、今も分かれてるっていうのも変な話だよ。

逆にお互いの歴史を研究すれば新たな事実が出てくるかもしれないのに。

今活躍してる魔法使いたちが完全に分かれていて、結局その弟子たちが研究施設にいて、だから反目しあうんだよね。

外の世界の分断が、研究施設の派閥を生んで、それがこの学園の科を生んで、お互いの科が疎遠になってしまうのも変だよね。

こういう構造は内部からじゃ変えられない。

でも、外の魔法使いの世界はもっとひどいから、外部からも難しい。

かと言って権力のある王様は魔法の事情に疎いからなかなか難しいんだよね」

「……うん」

ナスカはとりあえずそう返事した。

他のみんなも同じ気持ちだろう。

喧嘩をしていた二人も、そんな気すらなくなって呆気に取られている。

「トイネの言いたい事は分かった」

とりあえず、白魔法と黒魔法の反目を馬鹿馬鹿しいと思っている事は分かった。

だったら、説得すべきは喧嘩している二人だけだ。

「俺も、白魔法と黒魔法は同じ原理だし大して変わらないと思ってる、シェリンは違いが分かるか？」

「え？ え？ 違い？ 何か違うの？」

シェリンはナスカが思った通りの反応をする。

「うん。まあ、違いを考えると、そんなにないと思う。でも、いきなりそれを納得して考えを変えろ、と言っても難しいだろう。トイネも言ったけど、大の大人たちからそれが出来ないんだからな」

ナスカは少し息を大きめの呼吸をする。

ここからが重要なところだ。

「でも、とりあえずは嫌な奴、役に立たない奴でいいから、一緒にやってみるのは大事だと思う。実際やってみてもやっぱりそう思うなら、その考えを変える必要がない。でも、それでやっぱりそうでないとなったら、考えを変えればいいと思うんだ」

ナスカが慎重に言葉を選んで言うと、教室は一瞬しん、と静まる。

「で、ですがナスカ様……」

「エメリイ、お前はいつもは穏やかで優しい奴だろ？ ちょっと喧嘩売られただけで、そんなに取り乱したりしなくてもいいんじゃないか？」

「……申し訳ありません」

エメリイは、しゅん、とうな垂れる。

「俺の事を馬鹿にされたのが取り乱した原因だし、お前が優しいのは十分わかってるし、これまでも助けてくれた事をありがたいと思ってる。だから、これは俺のワガママだけど、いつも優しいお前でいて欲しいんだ」

ナスカが言葉を選びながら言うと、エメリイは顔を上げ、徐々に顔が赤くなっただかと思うと、再び下を向いた。

「はい……分かりましたわ……」

エメリイは消え入りそうな声で言った。

「さて、アール」

「な、何よ」

ナスカがアールに振ると、アールは少しだけ身構える。

彼女はトイネの言葉で戦意を失っており、また、喧嘩相手のエメリイが大人しくなってしまった事から、今更喧嘩をする気もないが、かと言っていきなり勢いを失うのも何となくできずに、自分でも困っている。

「多分、だけど、お前がチームを組む目的って、シェリンなんじゃないのか？」

「え？ そうなの！？」

理解もしていなかった当事者が驚く。

アールは一瞬困った顔をして、シェリンを見、ナスカを見て開き直る。

「そうよ。それがどうしたのよ」

アールはそっぽを向きながら答える。

「やっぱりそうなんだな。シェリンをサポートするためにチームを自分で作りたい。そうになると、シェリン以外に足を引っ張りそうな俺は駄目、黒魔法を馬鹿にするような事を言うエメリイもシェリンと一緒にさせたくない。シェリンの失敗を馬鹿にするかもしれないからな」

「……………」

アールは何も言わない。

それは肯定を意味するものなのだろう。

「お互い不満のあるメンバーってのもあると思う。けど、お互いチームを作りたいって目的は共通だと思う。多分、他にチームを組めるメンバーをお互い知らないんじゃないかな？」

誰も何も言わない。

その事は十分過ぎるほど分かってるからだ。

「とりあえず、その利害のためだけでも手を組まないか？ 喧嘩でチームの足を引っ張らなかつたら、喧嘩したっていいし、文句言っただっていい。うまく行くかどうかとか、そんな事はやってみないと分からないし、それでも先生にチームを組んでもらうより遥かにマ

シだと思うんだ」

ナスカはゆつくりと、それぞれの目を見ながら説得する。
静寂。

戸惑い。

ナスカが少し不安に思った頃。

「ボクはいいよ。ナスカくんって面白そうだしね」

トイネがにつこり笑って言う。

「わ、私も！ チーム組みたい！」

シェリンがそれに続く。

「……ナスカ様がそうおっしゃるのなら……」

エメリイも賛成してくれる。

これで四人がチームを組む事に賛成した。

残りの一人も賛成せざるを得ない状況だろう。

「分かったわよ！ シェリンがいつて言うならいいわよ。でも、言いたい事は言うわよ！ いいわね！」

少し怒ったように言うアール。

「ああ、それがチームってもんだらう」

ナスカが言うと、アールはやはり不機嫌そうにしていたが、それ以上何も言わなかった。

「じゃ、これで決まりだね」

「ああ。じゃ、今日はもう終わりにして、明日にでもチームの提出をしよう。昼休みは空いてるか？」

「うん、空いてるよね？」

シェリンが二人に確認し、二人が肯定する。

「じゃ、明日の昼に話し合って提出しよう。とりあえず食堂で」

「分かった。あ！ じゃあさ、一緒にご飯食べよ？ チームなんだし！」

シェリンがいきなり提案する。

チームを組むことをそれぞれが了承したとはいえ、微妙な空気が漂っている中、シェリンの空気の読めない提案は、均衡を崩す恐れ

すらあった。

「俺はいいけど……どうかな？」

ナスカはエメリイをちらりと見る。

「……ナスカ様がいいのなら構いませんわ」

少しだけ嫌そうな顔をしているが、肯定自体はした。

「あと、そっちのアールも……」

「いいわよ、好きにすれば？」

「トイネもいい？　じゃあ、明日はみんなでご飯を食べましょう！」
シェリンは一人無邪気にそう言った。

ナスカは、今日の喧嘩の続きがないように祈るばかりだった。

「今日は、本当に申し訳ありませんでしたわ……」

背後からの声に、ナスカは振り返る。

チーム結成から数分後、黒魔法科の彼女らと別れて、ナスカは最初の目的通り、エメリイを送りに校門に向かっている。

「？　何がだ？」

「先ほどは取り乱してしまい、喧嘩をしてしまいましたし、ナスカ様にも失礼なことを言ってしまった……」

「ああ、まあ、確かにちよつと困ったけどな」

ナスカが言うと、エメリイは申し訳なさそうにうつむく。

「でも、うぬぼれるなよ。あの程度、俺がお前を普段困らせているレベルの足元にも及ばない。もっと精進するんだ」

「は、はあ……え？　あ、いえ、これ以上困らせるわけには……」

「いいんじゃないのか？　女つてのは、少し男を困らせた方が魅力的らしいぞ？」

ナスカが言う。

深い考えのない、軽い言葉だったが、エメリイはそれを重く受け止めた。

「……ナスカ様は、困らせる女性の方が好きなのですか？」

「困るのはやだなあ、面倒くさいし」

「ですか　ですよね」

「でもまあ　」

ナスカはやはり深い意味もなく、軽い気持ちで言う。

「エメリイなら、仕方がないよな」

「……………！？」

エメリイはやはり、それを必要以上に受け止める。

「エメリイにはずいぶん世話になってるし、かなり困らせてと思うからなあ。多少困らされても仕方がない」

「いえっ、あのっ、わたくしはナスカ様をお世話する立場として…

…」

顔を真っ赤にしてうろたえるエメリイ。

「それに、今回も俺の事を馬鹿にされたから怒ったんだしな。本当にエメリイには頭が上がらないな」

「……………当然のことを、したまですわ」

エメリイはこれ以上なくうつむいて赤面を隠し、つぶやくような小さな声で言う。

「ま、そんなわけだから気にするな。怒ったエメリイも可愛かったしな」

「……………」

エメリイは更に顔を真っ赤にするとはいきや、大きなため息をついた。

「そう言えば、ナスカ様はそういう方でしたわね……………」

「？　どんな奴だ、俺？」

ナスカは不思議そうに聞く。

エメリイは、もう一度大きなため息をつく。

大抵の人間は思春期を過ぎると、異性に気を使うようになる。

不用意な発言をしたりしないように言葉を選んだり、変な意味に取られないように考えながら話すようになり、結果慣れるまではぎ

こちなくなるものだ。

だが、ナスカにはそのようなものはない。

不用意な発言も誤解されそうな発言も平気でして、だから変な事も沢山言うが、どう聞いても愛を囁いているとしか思えない事も平気で言う。

白魔法科ではそれでしょっちゅう女生徒を赤面させている。

普段言っている事が変な事ばかりであるため、そのギャップから本当に恋をしてしまいそうになる女生徒も多少いない事もない。

だから、エメリイはナスカが思っている以上に困らされている。

「何でもありませんわ。ナスカ様は、優しく、格好よろしくて、背も高くて、大好きですっ！」

「な、何だよいきなり？」

「いつもの仕返しですわ」

そういうとエメリイは足早に校門を抜けて行く。

その向こうには執事と思しき男性が待っていた。

ナスカはその様子を半ば茫然と見つめていた。

「何だっただ……」

つぶやきながらナスカは校門を背にした。

「あ、あの……」

校内に戻ろうとしていた彼に呼びかける声。

「シェリンか。迷ったのか？ 寮はこっちじゃないぞ？」

「違うよっ。寮はそんなに迷わないもん」

「少しは迷うのか。まあいい、どうしたんだ？ あの二人はどうした？」

「あの二人はもう寮に戻ったと思うよ……あのね……」

シェリンは、うつむいてもじもじし始めた。

「トイレなら俺に言わなくても行けばいいぞ？」

「違うっ！ さっきいっぱい出した！」

「そんな報告はいらん。用件を言え」

「だ、だからね、お願いなんだけど、言わないでってこと」

「お前がトイレでどれだけ出したかなんて、いちいち言うわけがないだろう」

「違うのっ！ それは言ってもいいの！」

「それは女子としてどうだろう」

「あ、あのね……私が、本当は白魔法科に行きたかった事、言わないで」

シエリンに懇願される。

彼女にお願いされるのは、これで三回目だ。

「ま、あのアールって奴は白魔法嫌いっばいしな。そんな事がばれたら、さすがに縁を切られる事はないだろうけど、多少ぎこちなくなるだろうしな」

「う、うん……」

「ま、言わないし言うつもりもない……いや、ハチミツはいらない」
「え？ いいの？」

シエリンは出しかけたハチミツをしまう。

「俺だってもうチームメイトだからな。団結が崩れるような事はない」

「うん、ありがとう」

シエリンはにっこり笑う。

「じゃ、寮に帰るか」

「あつ、ちよっとだけ教科書見せてよ。二年生の！」

「あー、じゃ、一旦どこかの教室に行くか」

「うんっ！」

元気よく答えるシエリン。

夕暮近い校舎。

二人の影がその大きな影へと消えて行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3589ba/>

白い黒と黒い白

2012年1月10日22時46分発行